

地球の木

地球上のすべての人たちと共に生きたい

CONTENTS

■ 2019 ラオス訪問	1,2
■ カンボジアのクラフト	3
■ よこはま国際フォーラム2020	3
■ ネパールから嬉しいニュースが続々と!	4,5
■ 南北코리아と日本のともだち展	6
■ 「IR」みんなで考えましょう	6
■ 地球の木と私	6
■ 気仙沼だより	7
■ 学生団体と情報交換	7
■ 活動日誌	7
■ インフォメーション	8
■ 編集後記	8

2019
ラオス訪問

“ベテラン”と“新米”が見て感じた支援地の村

「来年はありません。“とっておきの”いいスタディツアーにしますから是非ご参加を」との日本国際ボランティアセンター(JVC)の呼びかけに応じて、2019年11月末、私たち二人(斎藤:新米S、中野:ベテランN)はラオスに行ってきました。JVCは年1回、支援団体向けに村を訪問するスタディツアーを行っています。今回はプライベートで参加したせいもあり、いつもよりずっと自由な気分で、実質3日間のサワンナケート県での濃いスケジュールをこなしてきました。



私は今までスタディツアーというものに参加したことはなく、ラオスの山奥の「未開地」といって<新米S> もいいような村に行くのも初めてでした。1時間半位、未舗装の山道を車で大揺れに揺れながら走って着いた村は、全体にポコをまとったような村で、実は正直、気持ちが引いてしまいました。つくづく、大変な暮らしだなあとまず思ったわけです。それがピン郡の、洪水の被害を受けたゲンサイ村。軟弱な新米はどうも落ち着かずうわの空でした。

でもだんだん慣れて、にっこりしたくなるような物も見えてきました。高床式の家の、あれが「キッチンガーデン」というのでしょうか、生き生きとした青菜のみどりや空に映えてきれいなこと。法律カレンダー(村人の「法律意識啓発」のためにJVCなどが作成)も家の入り口にか

かっています。あちこち走り回る子豚の体の丸さ加減。帰り道、学校の横を通過して、白い制服姿の子どもが遊んでいるのが夕暮れの中に見えました。「ああ、学校もちゃんとあるのね」と大いにほっとしました。



キッチンガーデン



初めてラオスの地を踏んでから15年ほど。その当時から比べるとビエンチャンの急激な変化は目<ベテランN> を見張るものがありますが、村の様子はそう変わりませんね。国としてはGDPが成長率7%ということですが、その恩恵で国民の6割以上を占める農民の暮らしが豊かになったかという、そういう感じはあまりないです。

ゲンサイ村では昨年9月の洪水の話に迫力がありました。川のほとりにある村で、村の中もかなりの高低差のある地形。数



ノンハン村の共有林を歩く

ヵ月たった今も家の壁や木々の葉っぱに泥水の跡が残っています。副村長さんの話では「夜遅くなっていよいよ危なくなり、個々の判断で逃げた」とのこと。親戚がボートで助けに来てくれたという人も。幸いなことにひとりの死者もでなかったそうです。ほとんどの家が家財道具を流され、家は無事でも田んぼは全滅で米が全く足りないと言っていました。JVCは被災直後の緊急支援を始めとして、私たちが訪れた時は、主食に代わるイモ類や促成の野菜の苗、来年度のための種もみ等の配布、また飲み水としての浅井戸の修理などの支援をしたとのこと。今後も必要な支援を続けていくことになるでしょう。



<S>

次の日訪ねたのはアサバントン郡のノンハン村でしたが、その前に表敬訪問した郡庁が興味深かったです。外国からどんな人物が面会にくるのか、ち

ちゃんと事前に知らせてあるのだとか。緊張して待つ一行の頭上には、マルクスとレーニンの肖像画がかかっています。知事さんの挨拶。通訳係のJVC現地駐在員の山室さんは知事とのやり取りをすばやく簡潔に説明してくれます。程よく堂々としていて頼もしい限りでした。



<N>

山室さんは昨年と比べてみても、村人との関係がより親しくなり、コミュニケーションもスムーズになってきているように感じました。頑張っているなと。被災した村での村人への丁寧なインタビューを聞いて「本当に必要な支援は何なのか、誰に対してなのか」それを探るためのJVCスタッフの努力や忍耐に頭が下がる思いがしました。



<S>

現地スタッフといえば、日本に研修に来たこともあるフンパンさんに会えて懐かしかったです。彼はもうずいぶん古株ですよ。



<N>

ラオス人スタッフのリーダーであるフンパンさんは、特に役人との交渉の場面で力を発揮しているようです。ラオスは圧倒的なコネ社会。MoU(覚書:政府の許可のこと)取得の際も、大変な時間とエネルギーを要してもなかなか進まなかった懸案が、ある時、相手方の役人がフンパンさんの同級生だったことが分かり、フンパンさんが電話すると、すっと動き出したらしいです。



<S>

ノンハン村ではJVCの若い女性スタッフを中心に「ジェンダー(社会的性差・性別役割)研修」が行われていました。高床式の多目的集会所に男性7, 8人、女性10人位が集まって、それは楽しそうに沸いていました。日常をとりまく様々な家族の仕事がカラフルなカードになっていて、それを「男」「女」「両方」のところに置いていき、男女で意見を言い合うというもの。きっとどこの国に行っても男の言い分、女の言い分は同じで、そう目新しい事はないのだろうなとも思いましたが、とにかく参加者みんなのノリが良く、笑い顔や声に引き込まれました。

ノンハン村は国道から近く、開けて明るい感じの村でした



ゲンサイ村で山室さん(中央)の説明を聞く

が、周辺は多くのさとうきびプランテーションや製糖工場もある地域。不当な出来事に抗議して村人に初の逮捕者が出たのも近隣の村だそうです。



<N>

JVCの支援活動の一つに村の共有林の設置があります。ノンハン村のはずれに広がる村の共有林を村人の案内で歩きました。そこは村の誰もが自由に入って(木の伐採は原則禁止だが)、薪、きのこや竹の子、ハーブ類、ウサギやリスなどの小動物、薬用物などを採ってくる宝の山。自分たちで話し合っ作ったルールに基づき、違反した場合の罰則まで決めているそうです。陽が差す明るい林で、日本と大きく違うのは、ふかふかした腐葉土ではなく白っぽい砂地のような地面でした。その森を歩きながら案内してくれた村人のボンサンさんは「この木の葉はラブ(サラダ)に入れるし、木の皮を煎じると切り傷に効くし、この木はいい炭になる。これは腹痛に効く、高血圧にもいい」などなど。とにかくその知識がすごい。生きる知恵なのでしょうね。「子どもたちにもこの知恵を伝えていきますか」の問いには「子どもたちは学校が忙しくてね。週末位しか私と一緒に森に来ないから、あまり森のことは知らないね」という返事。「もったいないなあ」と分かるのは、日本の私たちと同じように50年も経った頃なのでしょう。



<S>

どこの国を旅しても市場に行くのは楽しいものです。大きな市場(タラート)で私が買ったのは一袋の“焚きつけ”。ツヤツヤと見るからに油のありそうな赤っぽい木を削ったもので、帰国後、山荘の薪ストーブで使ってみたら、パーッとよく燃えました。もう一つ今も目に鮮やかに残っているのは、辺境の村に向かって突っ走る車をちょっと止めて立ち寄った小さな出店。生きのいい色とりどりのあれやこれやが売られていました。丸い竹かごに入れられた鶏や鴨。青物。そして、これが川で捕れたの?と思うような巨大な貝や丸々太ったおいしそうなお蛙。自然の豊かさが直に感じられるような獲物たちでした。その地で生き生きと暮らす人たちと接するのは理屈なしに楽しいものですね。心のこもった素晴らしいスタディツアーでした。

(ラオスチーム 中野 真理子、会報作成チーム 斎藤 和子)



ノンハン村でのジェンダー研修



～カンボジアのクラフト～

伝えたい、どんな人がどんな気持ちで



タブロムのオーナーのコンさん

「地球の木は、NGOショップ・タブロムのみなさんが作ったポーチやバッグを販売しています。ただ可愛いから、ただ美しいからということでは買ってもらわずに、どんな人たちが作っているのか、どんな気持ちで作っているのかを知っていただき、大切に使用してもらいたいと思っています。タブロムのみなさんのことをもっともっと伝えられるように、お話を聞かせてください」とタブロムのオーナーであるコンさん、サムさんご夫婦にメールを送ったところ、すぐに「OK!」とお返事が届きました。

1989年、コンさんは12歳のとき、友達と道を歩いていた時に友達が地雷を踏みました。地面に倒れた友達を助けようとしたとき、自分の右足が動かないことに気付いたそうです。とても残念ですが友達は病院へ行く途中で亡くなりました。コンさんは命は助かりましたが、右足を切断。18歳から義足を使い始めました。その後、障がい者のトレーニングセンターなどで仕立ての技術を学びました。ホテルやレストランの飾りやおもちゃなどを作る仕事をしていく中で、社会的に弱い立場にある人たちへの雇用の機会の必要性を感じ、2003年にタ

ブルームを設立しました。それから17年、タブロムは質の高いシルクのバッグやアクセサリーを作り続けています。

もちろん、タブロムの素敵な製品はコンさん、サムさんお二人だけで作っているわけではありません。20名近くのスタッフがタブロムで働いていますが、そのうち90%のスタッフは地雷などで障がいを負った方たちです。ある女性(35歳)はバッグのパーツ作りを担当して3年。タブロムで仕事を始めてからは、「実家に仕送りができるのでうれしい」と話してくれました。将来は、実家を建て直してあげたい、とのこと。ある男性(40歳)はタブロムで15年働くベテランスタッフ。バッグを縫う仕事をしています。「お給料を貯めて、家を買いました。子どもたちを出来るだけ大学まで通わせたいので、これからも仕事をがんばりたい」と話してくれました。「タブロムで働くまで、カンボジアの一部で流通しているアメリカドルの存在を知りませんでした」と話してくれたのは53歳の女性。バッグの裁縫を担当して5年、将来はバッグのお店を開きたい、と夢を持っています。

コンさんご夫婦は、社会的に弱い立場にいる人たちをもっと支援していくことにやりがいを感じています。みんなが幸せに働いて家族を養っていくことができるようなしっかりした技術と仕事を得ることに貢献したいと思っています。

バッグやアクセサリーひとつひとつにある物語をこれからも丁寧に伝えていきたいと改めて感じました。

(クラフト担当スタッフ 竹内 千佳)



スタッフでデザインを選んでいます

よこはま国際フォーラム2020

2月15日、16日にJICA横浜で「よこはま国際フォーラム2020」が開催されました。よこはま国際フォーラムでは、国際協力や多文化共生に関する講座が開かれます。地球の木は「クラフトから見えるカンボジア」をテーマに参加。まず参加者がカンボジアについてのカードゲームを行いました。「改めて聞かれると、カンボジア=アンコールワットのイメージしかないです」と頭を抱える人も。答え合わせも兼ねて、カンボジアについて説明を行いました。特に

タブロムのクラフト



伝えなかったのは「地雷」について。殺すことよりも傷つけることで、精神的・物理的ダメージを与える地雷は「悪魔の兵器」と呼ばれています。カンボジアには今でも400～600万個の地雷が埋まっていると言われており、年間100人以上の人たちが被害にあっています。タブロムでは地雷被害により、社会的に弱い立場に置かれている人たちが縫製などの技術を身に付け、自立を目指しています。(カンボジアチーム 竹内 千佳)

ネパールから嬉しいニュースが続々と!

農民会議宣言!

前号ではロシ地域から500人(最新情報では570人)が集まった農民会議のニュースをお届けしました。そこで行われた、農民たちと行政のリーダーたちの話し合いから生まれた約束事を明文化した「農民会議宣言」。7月の水害を乗り越えて暮らしを改善したい、という農民たちの切実な思いと責任を持って変革に関わろうとする決意が窺えます。



給水パイプの敷設
「ありがとう! 2ヵ月ぶりの安全な水を」

農民主体で地域を変える

11条からなる「農民会議宣言」は農民主導で採択されたといえます。ちょっと中身を覗いてみましょう。

第1条「この宣言はロシ地域における農業のあり方を自給自足農業から商業的農業に転換するものである」。平たく言うと、これまで農作物を家族のために作っていたが、これからはマーケットで売れるような作物を作るということです。

第2条には「ロシ農業ネットワークが主体となって、村単位で活動していた農民グループを農村自治体(区に相当する)単

位のネットワークに拡大する。農民会議に参加したすべての農民は、強力なネットワークづくりに尽力する」とあり、農民たちの主体性が強調されています。

有機栽培の推進へ!

ロシ地域は果樹栽培に適しているため地球の木のプログラムでも小学校の校庭に果樹を植林したことがありました。低地のピンタリではジャックフルーツ、パイア、マンゴー、グアバ、バナナが、高地ラジャバスでは柑橘類が採れます。

地方政府は農民たちとパートナーシップを組んで、換金性の高い果樹栽培・有機栽培を進めていくこと、有機農業を推進し認証制度を作ることを公約しました。地方政府はまた「私たちは皆、ロシ地域の農民たちが技術、投資、経営面での可能性を伸ばすことができるように尽力する」と協力を謳っています。

「開発のステップ」

SAGUNはこれまでも行政と協力して地域の開発を進めようと努力を重ねてきました。2019年度の計画には、行政のリーダー研修が入っており、これは地方政府からの要望を受けたものです。SAGUN事務局長のマハントさんは、この農民会議宣言を好機と捉えています。地方政府の役人たちは、500人もの農民の前で宣言書に署名をしたので、やらざるを得ない、責任ある立場に追い込まれたのです。これが「開発のステップ」なのだそうです。

民と官をつなぐ

海拔1700メートルの、ヒマラヤを望む村ラジャバスでは、市場に出す野菜作りのためのビニールハウスづくりが始まっています。村人たちはビニールハウスの骨組みに使う竹を切り出す作業に大わらわ。農民グループと行政がパートナーシップを組んで事業を進めるという公約どおり、マハントさんが行政の専門家を伴い村々に入りました。

回る、回る、資金は回る♪

ヤギの飼育プログラムも同様に行政を巻き込むことを意図して進められています。地球の木が2017年から支援してきたラジャバス村のヤギ飼育プログラムには、10軒の農家が参加していましたが、そのうち9軒が子ヤギの出産、飼育に成功し、無事にヤギを売って収入を得ることができました。親ヤギも子ヤギも死んでしまうという気の毒なケースもありましたが、再チャレンジしています。9軒から返還された資金は次のグループに回します。2017年に訪問した時、参加者が選ばれたばかりと言っていたコカム村でも、2年間のプログラムが終わり、貸付金は次のグループに引き継がれます。このように、地域で回転資金がうまく回っているのはとても嬉しいニュースで、村の自立への第一歩です。



ヤギの出産

こんな未来があるかも…

SAGUNと地球の木は、今後人材育成にフォーカスした活動を支援していくことになりました。他地域での事例を研究するケーススタディ・トレーニングもそのひとつ。その中でスタッフが書いたマクワンプル郡の成功例がSAGUNのニュースレター「ロシ・ラハール」に掲載されています。写真は、マーケットで自慢の野菜を売る女性たち。農業組合を作った女性たちが色とりどりの野菜を売っています。地域全体で取り組むと、これまで個人や小グループではできなかったことが可能になるという一例です。ラジャバス村のビニールハウスは村人たちにどんな幸せをもたらすか、楽しみです。



売り手も買い手も真剣勝負

元奨学生の効果調査

3月には、2007年度から13年にわたって継続してきた奨学生支援プログラムの参加者を集めて聞き取りを行う計画があります。13年間で11年生と12年生延べ202人が高校に行くことができました。大地震や水害によって延び延びになっていた調査です。

マハントさんから「これまでの奨学生に会える、またない機会なので地球の木にもぜひ参加してほしい」「村人たちにとって地球の木の訪問は何よりの力づけになる」というメールが来て訪問を計画していましたが、このたびの新型コロナウイルスの蔓延で延期を余儀なくされました。

「地球の木の支援がなかったら高校への進学はありえなかった」と言っていた女子生徒たち。「教師になりたい」と言っていた男子生徒たち。高校を卒業した後どのような未来を創ったのでしょうか。夢を叶えることはできたのでしょうか… 次の報告をお楽しみに! (ネパールチーム 乳井 京子)



「農民会議宣言」を採択

学びたい…中村哲先生が遺されたもの

アフガニスタンで人道支援に取り組むベシャワール会現地代表の中村哲さんが、昨年12月4日に武装集団の凶弾に倒れました。

中村先生は日本キリスト教海外医療協会の派遣医師として「ハンセン病診療」と「山村無医地区の診療モデル」を目標に1984年にパキスタン、ベシャワールに赴任。汚い水と貧しい食糧事情を目の当たりにし「医療は場所によっては全く役に立たない」と悟ります。その後、アフガニスタンの人口の半数1,200万人を飢餓に陥れた2001年の干ばつを機に白衣を脱ぎ、ショベルとつるはしを持って井戸を掘り水路を切り拓くことを決意します。書物や資料を読み、一から勉強して建設工事の指揮を執り、できるだけ機械に頼らない工法、現地の人たちが自分たちで作り、修理できる治水技術を取り入れました。7年後に25.5kmの水路が完成し、3,500ヘクタールの農地と15万人の食料を提

供。現在、農地は1万6,000ヘクタールまで拡がり60万人の命を支える楽園に変身しました。先生が口を酸っぱくして言うのは「地元の人々の習慣、生活スタイルや文化を尊重しないとうまくいかない」ということです。

翻って地球の木で行っているネパールはどうでしょうか。我々は現地NGO・SAGUNと協力して今回の洪水被害のサポートやヤギの飼育プログラムなどを行っています。SAGUNは今回の日本からの洪水義援金をできるだけ地元の人々の意向を聞き、すべての人に平等に行き渡るようにと損傷した給水パイプの補修にあてがいました。地元住人すべてが納得するというのは簡単なようで実は難しい。先進国の支援というのは時として「いらぬ物の押し売り」になりかねない。そういった意味でSAGUNの地元目線でのアドバイスはとても貴重なのです。

(ネパールチーム 勝田 文隆)

南北コリアと日本のともだち展

この絵画展は「21世紀を平和の世紀にしたい」との願いからスタートしたもので、今年で通算19回目。地球の木はこの趣旨に賛同し、同展の実行委員会の一員です。今回は「わたしがあくりたい金メダル」をテーマに東アジア各地の子どもたちが、お世話になっている人や感謝を伝えたい人などを紹介するもの。同展は昨年8月に朝鮮・ピョンヤン市、韓国・済州島、10月には中国・延吉市の児童図書館などで催されました。国内では、2月に大阪展が開催されました。残念ながら、2月28日から予定されていた東京展は新型コロナウイルスの影響で延期されました。



画像提供は南北コリアと日本のともだち展実行委員会

「IR」みんなで考えましょう

昨年、横浜市はカジノを含む統合型リゾート（IR）の誘致を表明し、事業に着手しました。横浜市長は、市長選挙当時、IR誘致は「白紙」としていました。民主主義のプロセスを無視したこの決定に抗議し、IR誘致の撤回を求め、カジノに依拠しない持続可能なまちづくりを推進していくために、「横浜未来アクション」を2019年10月に設立しました。それ以来、この問題を地域で共に考えるためのミニフォーラムを開催しています。

横浜市は、歴史豊かな美しい港を有し多くの観光客を呼び、また住みやすいまちとして栄えてきました。IR事業は国家戦略であり、誘致するという事は国主導で行うことを市が認めたと対し、市民の主体性を発揮できる余地がなくなると私たちは捉えています。横浜市は増収効果を年間820億から1,200億円と示していますが、市民説明会では「これだけの数字を出すのであれば5,000万円程度負ける人が出てくる」との認識も持っているような回答がありました。また、運営会社と横浜市の



契約には、収益が上がらない場合は市が訴えられるというISD条項（投資家と国家の間の紛争解決のための条項）が入れられる可能性があります。

今、市民は問われています。

地球の木が設立以来めざしている「人々が自ら力をつけて困難な状況を改善し、住民主体の地域づくりを行えるように活動を続けていること」と同様に、日本により良い未来を残すためにも行動を共にし、市民の自治力を次の世代に繋いで行きましょう。

横浜未来アクションのFacebookで情報をチェックしてください。

（生活クラブ運動グループ 横浜未来アクション 共同代表世話人 五十嵐 仁美）



横浜未来アクションFacebook

<https://www.facebook.com/yokohama.action>

※地球の木は横浜未来アクションの賛同団体です。



多くの刺激を受けました

地球の木と私の関係は神奈川県で高校の教員をしていた12年くらい前にさかのぼります。当時はちょうど現在住んでいる長野県に移住すべく長野と神奈川を行き来しているころだったかと思います。もともと自給的な「農」や環境・エネルギーに関心があったので、最初に会員向けの国内スタディツアーを会員の友人たちと行いました。そのツアーを発展させた1泊での「グリーンツアー」も行いました。見学先は長野県富士見町の私の居住地周辺と山梨県北杜市周辺でした。主なテーマは日帰りの時と同様で、「都市と農村」「自給的な農」「エネルギー」など多岐にわたります。各訪

問先では多くの情報、刺激を受けたことを覚えています。

また、この間の2011年には東日本大震災が起こり、地球の木でも様々な支援活動が行われる中、7月に気仙沼での炊き出しの活動にお誘いいただき、理事の方たちと一緒に行くことができたことは大変有意義なことでした。

その後は2016年ころから始めた会員有志たちとのジャガイモ栽培ツアーや自家栽培のお米、手作り醤油等でお付き合いいただいておりますが、次第に地域での活動が忙しくなり、なかなか横浜方面のイベント等、学びの場に行く機会が少なくなってしまったのが残念です。しかしながら今後も地球の木を通じての国際支援等、できるところでの学習またお手伝いをしていければと思っていますので今後ともよろしくお願いたします。

（長野県諏訪郡 北原 健朗）

地球の木さんには、震災直後からこの9年間大変お世話になり、元気をもらいました。炊き出しやイベントなどで、気仙沼の人たちを笑顔にさせていただいた事はまだ私達の心に残っています。

気仙沼の復興は現在も進んでいます。気仙沼大島への橋の開通に三陸道の開通。最近では、仮設店舗から複合商業施設の開店などがありますが、やはり私達Tree Seedが一番復興に近づいたと思うのは、仮設住宅に住んでいる人がほとんどいなくなった事でしょうか。まだ、数世帯ほど残ってはありますが、私達Tree Seedが活動していた五右衛門ヶ原仮設住宅が撤去になりました。毎日仮設住宅の皆さんとお茶会したり、季節ごとにイベントしたりとみんな笑顔で活動していたのは今でも大切な思い出です。地球の木の皆さんも何度も訪れていただき、思い出の多い場所でもあります。先日、久しぶりに行って見たところ、まだ工事中ではありましたが、震災前の野球場に戻っていました。これから、仮設住宅が建っていた公園や広場が震災前の風景に戻り、子ども達の声が増えてくるのが楽しみです。

津波の被害が深刻だった場所は更地のままだったり、防潮堤の工事が終わっていなかったりと、まだ完全に復興してはおりませんが、生活は落ち着いたように

思われます。ここまで復興できたのも、応援していただいた皆さんのおかげだと思っております。本当にありがとうございました。

現在、Tree Seedでは震災復興支援の活動にひと区切りを付け、子ども支援活動を行っています。去年は、地球の木さんなどに支援をしていただき、親子での料理教室、チョコレート作りなども行いました。震災を乗り越えた子どもたちをいろいろな角度から今後も応援していきたいと思えます。

(NPO法人 Tree Seed 代表 小野寺 大志)



東日本大震災復興支援まつり2019で

学生団体と情報交換



津田塾大学の学生団体、「リアスマイル」のメンバー2名が地球の木の事務所を訪問してくれました。カンボジアの学校では保健の授業がなく、子どもたちが正しい保健の知識を身につける機会がほとんどありません。「リアスマイル」の皆さんはカンボジアの女の子たちが自分の身を守るように保健教育の活動を行っています。お互いのカンボジアでの活動内容や課題、これからの展望などを話し合いました。同じ国で活動していても、活動内容や世代によって見え方、感じ方は様々。「リアスマイル」のメンバーお2人と話をし、思い込みを持たずに、カンボジアの人たちと向き合わなければ、と初心を思い出しました。

(カンボジアチーム 竹内 千佳)

活動日誌 (12月~2月抜粋)

12月

- 4日 IR勉強会(横浜未来アクション)
- 5日 デポー展示会(つなしま)
- 7日 東日本大震災復興支援まつり2019
- 12、13日 デポー展示会(つつじが丘)
- 14日 南北コリア絵画展勉強会
- 16日 第7回定例理事会
- 18日 湘南学園 中学生来所

1月

- 15日 第5回コア会(勉強会)
- 21日 第8回定例理事会
- 27日 デポー展示会(東寺尾)

2月

- 10日 JVCラオスプログラム中間報告会
- 13日 第9回定例理事会
- 14日 津田塾大学「リアスマイル」来所
- 15日 よこはま国際フォーラム
- 17日 西東京市立東小学校 出前講座

第21回地球の木総会のお知らせ

【日時】5月23日(土)13:30~16:30

【会場】オルタナティブ生活館 2F「オルタリアン」

※詳細は別紙の「第21回地球の木総会のお知らせ」もしくは団体ホームページをご覧ください。

年末募金

ご協力いただきありがとうございました

今年も会員の皆さまをはじめ、130名を超える方からご協力をいただきました。

皆さまのあたたかいお気持ちに心より御礼申し上げます。

年末募金総額:944,170円

＜寄付先別内訳＞

・ネパール 教育支援	183,900円	・水害被災地復興支援	109,500円
・ラオス 農村支援	41,500円	・指定なし	539,770円
・カンボジア 自立支援	69,500円		



————— 2019年にいただいたご寄付の領収書を2020年1月28日に発送いたしました。—————



地球の木カレンダー2020

ご協力いただきありがとうございました

壁掛け、卓上合わせて528冊ご購入いただきました。

カレンダーの収益は、ネパール・ラオス・カンボジアの支援に使われます。

皆さまのご協力で心より御礼申し上げます。

地球の木講座2020 今、この人に聞きたい!

SDGs時代の国際協力とは?

日時: 4月11日(土)14:00~16:00

※ 新型コロナウイルスの影響により、変更の可能性があります。

会場: かながわ県民センター3F 301

参加費: 500円

講師: 大橋正明さん

(聖心女子大学グローバル共生研究所所長)



「だれ一人取り残さない!」を掛け声に、2030年までの達成を掲げたSDGs(持続可能な開発目標)。政府、企業は一齐に取り組みを始めたが、NGOにとってはなにが変わったのだろうか。南アジアを中心に、40年間、国際協力の最前線を歩み続ける大橋正明さんに、現場から見える国際協力の变化と今後の行方について語っていただきます。

デポ一
展示会

3月12日(木) 東戸塚

3月23日(月) 霧が丘

24日(火) //

4月23日(木) ほんもく

24日(金) //

4月27日(月) 緑園

28日(火) //



特定非営利活動法人

地球の木



ラオスの支援地の村人の、昔から受け継がれてきた森の恵みに感謝し、森を大切にしている姿に羨望と共感を覚え、今日の激しい時代の流れに押しつぶされことなく、豊かな森がこれからも子どもたちに引き継がれて消えないでほしいと思っています。(T.K)